

出土資料からみた中世横瀬浦

Medieval Yokoseura from the Viewpoint of Excavated Materials

中島 金太郎*
Kintaro NAKAJIMA

要旨

長崎県西海市西海町横瀬郷は、平戸に続いてポルトガル船が来航し、大村純忠の庇護のもと南蛮貿易港「横瀬浦」として栄えた地域である。筆者は、横瀬郷で2020年度～2022年度にかけて試掘調査を実施し、3カ年の調査の結果、掘立柱建物跡を含む34箇所の遺構、貿易陶磁を含む695点の遺物を検出した。2021年度国際観光学会研究発表会では、同年度までの中間報告を行ったが、2022年度までの調査の結果、一定の性格が把握できる成果を得ることができた。本稿では、3カ年の調査を踏まえ、出土資料からみた本遺跡の性格および中世の横瀬浦について考察するものである。

キーワード：発掘調査、南蛮貿易、輸入陶磁器、石州銀、後期倭寇

I はじめに

長崎県西海市西海町横瀬郷は、平戸に続いてポルトガル船が来航し、大村純忠の庇護のもと貿易港「横瀬浦」として栄えた地域である。中世の横瀬浦は、1562年に南蛮貿易港として開港したものの、1563年に発生した後藤貴明らの反乱に乗じた豊後商人による焼き討ちにあって焼失したとルイス・フロイスの『日本史』などの文献に記載が残る（フロイス 1965：264-275）。焼き討ち後、南蛮貿易港は長崎市の福田港、そして現在の長崎港に移転し、現在の長崎の発展の礎となった。その後横瀬浦には、近世期の大村藩の地誌『郷村記』に人々が居住した記録が残るものの（藤野 1982：237-273）、日本あるいは長崎県の歴史上特筆すべきトピック

はなかった。上記を背景に筆者は、地元の地域づくり協議会からの協力要請のもと、地域史の解明を目的に2020年度から試掘調査を実施してきた。所謂横瀬浦は、筆者が主体となって実施した試掘調査まで発掘調査は行われず、焼き討ちの痕跡や当時存在したとされる教会堂跡などの物的証拠に乏しいのが現状である。本稿は、2020年度から2022年度の調査結果からみた本遺跡の性格および中世の横瀬浦について考察するも



図1 横瀬浦の地理（地理院地図GSIマップを転載・加工）

*長崎国際大学人間社会学部国際観光学科

のである。

Ⅱ 横瀬浦調査の背景

本調査に至る遠因として、2018年度に横瀬郷との関係の深い原哲弘長崎国際大学准教授（当時）を通じて、横瀬郷に関する歴史・文化に関する共同研究の要請があったことが挙げられる。原准教授は、長崎国際大学に着任して以来横瀬郷を含む西海市をフィールドに長年活動しており、西海みかんドームや七釜鍾乳洞の建物設計、さいかい元気村におけるグリーン・ツーリズムの実践（原2018：111-121）などの活動と同時に、横瀬郷および横瀬浦天主堂の歴史についても関心があり、長年独自に研究活動を実施されてきた。2018～2019年度には、長崎国際大学国際観光学科共同研究費として「横瀬浦天主堂に関する研究」（研究代表：原哲弘、共同研究者：内田智子）が採択され、国内外の図書館・博物館における資料調査、ポルトガルやフィリピン等での現地調査を経て横瀬浦天主堂に関する歴史研究を実施している（長崎国際大学2020：139）。

原准教授と筆者は、2018年度より横瀬浦天主堂に関する文献調査や踏査を共同で実施し、2019年には天主堂跡の推定地を探索した。原准教授は、アルメイダ修道士の書簡やフロイスの『日本史』、大村藩の『郷村記』などの史料を丹念に渉猟し、その記載を実際の地形に当てはめて大概の所在地を推定した。筆者は、原准教授の案を基に現地を踏査し、伝承されている建物が建築可能なスペースの探索および推定地での遺物類の表面観察を行った。調査の結果、西海市西海町横瀬郷の横瀬浦史跡公園の「小波止」周辺地域を横瀬浦天主堂推定地として比定した。これらの調査成果を基に、横瀬

浦天主堂推定地の試掘調査を計画し、2019年3月に西海市役所で調査に関する依頼を行った。しかし、横瀬浦史跡公園では2019年度から複数年かけて設備の改修工事が計画されており、調査を実施することが不可能であったことから、推定地での試掘調査を延期し、文献調査や近隣地域の踏査等に切り替えて2019年度内に調査を実施した。

発掘調査の直接的な契機となったのが、2020年6月に原准教授から筆者宛にあった「横瀬地域づくり協議会」の活動への参画要請である。原准教授からは、「横瀬地域づくり協議会」に地域の歴史を学び継承する部会を立ち上げることから、歴史学・考古学の立場から協力してほしいとの打診があった。また、その一環として横瀬郷の地域史の最も重要な要素である中世横瀬郷および横瀬浦天主堂の所在確認に関する依頼があり、当該歴史資産を地域で守り、後世へ継承していくために学術的な調査の実施が求められた。一方で、先述の横瀬浦史跡公園内での調査は、改修工事との兼ね合いから実施が不可能な状況にあった。そこで、2020年7月1日に現地の踏査を再度実施し、伝承に残る「上町・下町」の現状を確認したうえで、当時の下町にあたる西海市西海町横瀬郷4000番1（現況は果樹園および畑地）における試掘調査を計画した（図2）。



図2 調査計画図（Googleマップの航空写真を転載・加工）

また本調査は、大学生の考古学的知識および発掘調査と整理作業の技術の涵養を意図している。九州圏内の学芸員募集は、本州と比べて考古学分野の募集が多く、その多くが発掘調査の経験と整理作業の能力を求めている。長崎県北地域では、長崎国際大学が学芸員資格を取得できる唯一の高等教育機関であり、社会的なニーズを満たし学生の就職を鑑みた際に、考古学の知識・技術は必須であると判断されたことから、より実践的な知識・技術の涵養を調査の目的の一つとした。

Ⅲ 調査の経過

1. 2020年度調査

2020年度の発掘調査は、2020年9月13日～11月15日の内、9日間実施した。当調査では、当該地域における中世末期の遺構の確認を目的とし、2m×2m (4 m²) の範囲で試掘坑（以下、トレンチ）を設定した。

遺構確認の結果、中央部に不詳な穴状遺構（以下、ピット）を2箇所（第1ピット、第2ピット）、北東壁面に1箇所（第3ピット）確認した（写真1）。第1・3ピットは円形の平面形、第2ピットは楕円形の平面形を呈しており、第1ピットは単層、第2・3ピットは共通して、内包物を多く含む1層と極めて粘度の高い2層の2層構造であった。第1・2ピットからは遺物の検出は無かったが、第3ピットからは、中世頃とみられる土師質土器の破片および12世紀頃の中国磁甎窯産の盤とみられる陶器片が出土している。

遺物は、陶器30点、磁器30点、石器・石製品16点を合わせて76点を検出した。陶磁器類の年代は、中世～現代と極めて幅が広く、また大半が表土層である第1層から出土した。調査地点は、調査開始前から複数の陶磁器類が地表面に露出しており、人為的な攪乱があったと考えられた。調査結果



写真1 2020年度調査完掘状況

（東より、2020年筆者撮影）

においても、第1層から年代幅のある遺物が出土しており、後世の攪乱が証明されたこととなった。一方、本調査で確認された第2～4層は、第2層が近世頃の整地層、第3層は15～16世紀頃の中世と共伴する遺物から判断することができ、遺物は出土していないものの第4層は中世頃の盛土層と推察された。また、遺物の産地は肥前が大半であったが、中国産とみられる陶器7点、磁器3点が検出されており、中でも前述の磁甎窯産の盤は同一個体とみられる破片が3点出土しているのが特徴である。

2020年度調査では、遺構の年代把握のため、放射性炭素年代測定法を用いた科学分析を実施した。今回は、第2ピットから検出された炭化物を試料とし、株式会社古環境研究所に分析を依頼した。放射性炭素年代測定の結果、「試掘坑第2ピット覆土出土の炭化物は、510±20yrBP（2σの暦年代で1400calAD～1441calADの年代値）であり、中世中頃に相当する」との分析結果を得た（長崎国際大学博物館学芸員課程・一般社団法人西海文化財研究所2021：31）。つまり、第2ピットの数値年代は15世紀に遡るとのことであり、文献に残されている南蛮貿易港として栄えた16世紀以前から横瀬浦には人々が居住・活動した可能性があ

ることが把握できた。

2. 2021年度調査

2021年度の発掘調査は、2021年7月18日～11月28日にかけての18日間の日程で実施した。当該年度は、前回調査で確認した遺構の性格把握を目的に、2020年度調査区の北から東にL字状にトレンチを設定した(12m²)。調査区の層位は、第1層は現代の表土で、現代の農業ゴミが混入した部分を確認しており、第1層は後世の攪乱を多分に受けていると判断される。第1層からは、中世～近現代の遺物を検出しており、最も出土遺物数が多い。第2層は、人頭大の角礫が多数混入しているが、遺物は18世紀～19世紀の遺物を微量に含む程度で、遺物包含層は極めて薄い、あるいは削平されているとみられる。第3層は、微量の炭化物やφ5～10mmの橙色スコリア、地山の黄色ブロックを含む粘土層で、中世の遺物が検出されている。ただ、第3層は極めて薄く、ピット内と第2層下に僅かに認められる程度になっている。また、調査区南端には後世の盛土と見られる第4層があり、その下には自然に形成された岩盤層(地山)が存在する。

調査の結果、ピット13箇所、土坑：大型の穴状遺構1箇所、埋納遺構1箇所の計15箇所の遺構を検出した(写真2)。2020年度および2021年度に検出した遺構のうち、近似の平面形を呈するピットが複数存在することから、柱穴など共伴する遺構と判断した。例えば、2020年度に西壁内に検出したピットは、2021年度の第9ピットとおおよび同じ埋土であり、径も24～25cmと近似であった。第9ピットは、2021年度調査区の西壁に隣接することから、ピットの間隔は約2.0mである。これは、先行研究による中近世の掘立柱建物の柱穴の間隔(2.0mあるいは2.4m)に合致する(宮本1999)。また、2020年度調査の第2ピット、



写真2 2021年度調査完掘状況
(2021年筆者撮影)

2021年度調査の第2・10ピットも2m間隔で並び、ピットの深度はそれぞれ36～37cmであることから、共伴する遺構であると推察される。さらに、第3区に所在する第4・5・7・8ピット、第1土坑東端部直上から見た場合に一直線に並んでおり、杭列など何らかの意図が感じられた。このように、当該遺跡は、一地点に複数の建物が構築されていたことがピットの切りあいから判断される。

加えて、南端壁より埋納遺構とみられるピットが検出された。本遺構は、炭化物を多量に含む埋土が底面にあり、その上に青磁菊花形皿、少量の土を挟んで呉器手碗の破片と染付皿の破片3点、また土を挟んで鉄製角釘、その直上に片口鉢の底部、薄く土を挟んで人頭大の石が配されていた。2021年度の報告書では、全国に類例が無い旨を指摘し、当該遺構を祭祀遺構または礎石・束石のいずれかであるとした(長崎国際大学博物館学芸員課程・一般社団法人西海文化財研究所2022:55-56)。

また、磁器123点、陶器96点、石器・石製品24点、ガラス製品1点、金属製品2点の合計246点の遺物を検出した。中でも、



写真3 右：切銀（長1.5cm, 短1.4cm, 厚0.6cm）
左：ガラス製品（長0.9cm, 短0.8cm, 厚0.6cm）
(2021年筆者撮影)



写真4 2022年度調査完掘状況
(南より、2022年筆者撮影)

石州銀の切銀と見られる銀製品（写真3右）、アンチモンを含む鉛ガラス製のビーズ（写真3左）、出土遺物全体の約20%を占める輸入陶磁器など、希少な遺物が出土している。

当該年度は、前年度に引き続き炭化物に対する放射性炭素年代測定と、長崎県埋蔵文化財センターの協力を得て銀製品、ビーズ状ガラス製品などを対象とした透過X線分析、蛍光X線分析を実施した。放射性炭素年代測定では、第4層上面と埋納遺構から検出した炭化物を測定し、前者はcalAD1296～calAD1395（13～14世紀）、後者がcalAD1642～calAD1799（17～18世紀）の分析結果を得た。前者については、盛土が中世に行われたことの証左であり、後者は出土遺物（1630年頃製）との時代的な齟齬が少なく、概ね17世紀中～後期の遺構であると判断された。

3. 2022年度調査

2022年度調査は、2022年7月23日～12月18日の20日間の日程で実施した。当該年度も、遺跡の性格把握を目的に調査を実施し、2021年度調査区の東に2m×6mのI字状のトレンチを設定した（12m²）。

調査の結果、2022年度調査では前年度までとほぼ同様の土層堆積状況を確認したが、前年度までと比べて明らかに第3層が

薄い傾向がみられた。土層断面図を作成していても各壁面から第3層は殆ど目視できず、遺構内に遺存しているものを確認するにとどまった。一方、遺構としては、第3層からピット15基、カマド状遺構1基を検出しており（写真4）、昨年度までに比べて遺構の密度が高い傾向がみられた。

加えて、2020・2021年度調査のピットとの組み合わせで、2軒の掘立柱建物が復元できた。ピットの層序を確認すると、単層のピットが数的には多いものの、2層に分層できるピットも複数存在しており、2021年度の第5ピットを除き土層の堆積状況が似通っている。上記遺構の平面配置を行ったのが図3である。本調査では、ピットをPT、異なる性格の遺構をSXと記号を付け、検出順に通し番号を振っている。3カ年の調査の遺構記号が重複するので、ここでは便宜上記号の前に各年度の数字を記載した。図3の内、各年度の遺構番号を枠で囲っているのが2層堆積をする遺構で、平面図上で対応状況を見ると概ね波線と太線の2軒の掘立柱建物跡を復元することができた。

まず波線の建物は、図内の20PT03、

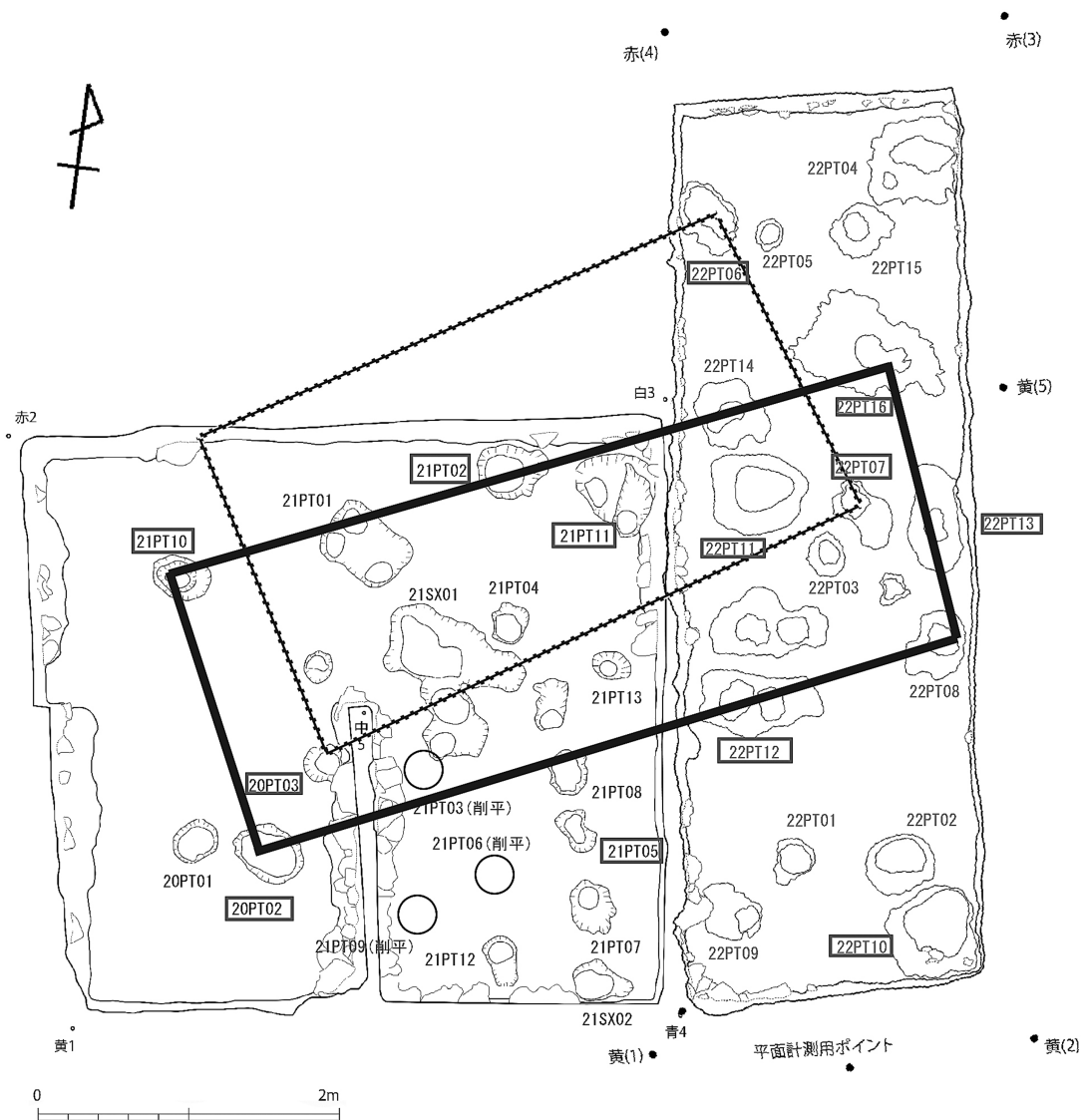


図3 2020～2022年度平面図合成 (S=1/50)

(2022年筆者作成)

22PT06, 22PT07, 21SX01が対応するとみられ、北西側は調査区外のため推測するしかないが、長軸4m、短軸2mを計る概ね矩形の平面形を呈するとみられる。出土遺物は、20PT03の中国磁甎窯産の盤(12世紀頃)、22PT06の土師質土器、22PT07の白磁口禿皿(13世紀～14世紀前)が第2層から出土し、21SX01からも同時期の白

磁口禿皿が出土している。加えて、2021年度に21SX01に連なる第4層で検出された炭化物の放射性炭素年代測定の結果、「calAD1296～calAD1395」、つまり13世紀末～14世紀末の測定結果が得られている。このことから、波線の建物は凡そ13世紀～14世紀前半までに建立されたものと推察される。

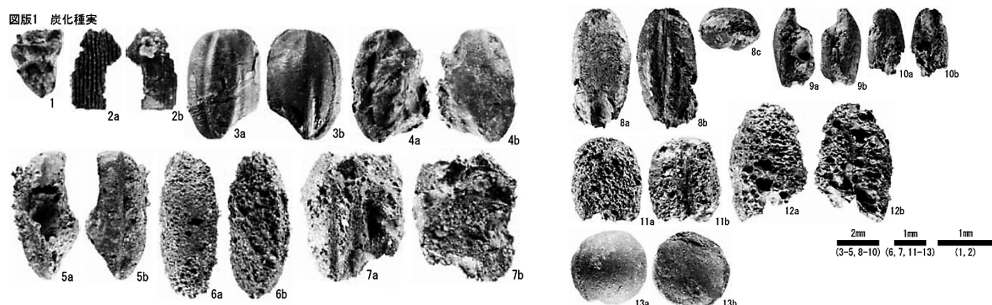


写真5 カマド遺構出土穀類（パリオ・サーヴェイ株式会社提供）

太線の建物は、長軸5m、短軸2mを計測し、長軸のピットの間隔は2～3mを呈する。21PT08、22PT08は、それぞれ単層のピットだったものの、前者は部分的に炭化物を多く含んでいる点が2層堆積ピットの第2層に近似しており、後者は建物の構築に使用したとみられる方形の石材が出土していることから、対応するとみられる。放射性炭素年代測定の結果では、20PT02が「calAD1400～calAD1441」、22PT16が「calAD1326～calAD1426」と14世紀～15世紀前半の測定結果が出ている。遺物は22PT16のみ出土し、16世紀の青花暗花文碗と16世紀半ばから後半にかけて堺で多数鑄造された無文銅銭と近似の銅銭が出土しているが、同ピットは極めていびつな平面形であり、2種の遺構が切り合っていると判断された。このため、太線の建物は凡そ15世紀頃のものとして判断され、また21PT02からは礎板石とみられる石材が検出されており、ある程度重量物を保管する倉庫のような建物ではないかと考えられる。

また、2022年度に検出したカマド状遺構は、遺跡の第2層直下から広域的に埋土が広がる状況が見られ、表面部分から被熱したブロック状の物質が確認できた。掘削を進める際にも、他の遺構とは異なりしまりが強い感覚を得たことから、通常のピットとは違うものとして判断した。カマド状遺構として判断した要因としては、遺構内よ



写真6 左：石鍋破片
（長3.1cm、短2.7cm、厚1.1cm）

（2022年筆者撮影）

右：無文銅銭
（直径2.3cm、口径0.6cm、厚0.05cm）

（長崎県埋蔵文化財センター提供）

り石鍋の破片が出土したこと、被熱した焼土ブロックと炭化物を多数含むこと、さらにパリオ・サーヴェイ株式会社の協力を得て炭化物を分析したところ、14世紀中葉～15世紀初頭の穀類が検出されたことが挙げられる。写真5は、検出した穀類の拡大写真である。

検出された穀類は、炭化種実の保存状態は不良であるものの、イネ、オオムギ、コムギの炭化種実と、カヤツリグサ属、カタバミ属、オドリコソウ属の種実5個が同定された他、炭化材0.95g（最大1.7cm）、炭化材主体0.27g、動物遺存体の歯1個、砂礫主体（土製品?）576.3g、植物片0.01gが検出された（長崎国際大学博物館学芸員課程、一般社団法人西海文化財研究所

2023：55-59)。イネの炭化種実を対象とした放射性炭素年代測定からは、calAD 1327-1410と概ね14世紀の年代が出ており、同遺構から出土した石鍋の使用年代とも概ね合致する。本遺跡のカマド状遺構は、五徳などを使って調理をしたカマド或いは炉状の遺構であり、恐らく同地点で火を焚き、石鍋などの煮炊き具を使用して穀類の調理を行ったと考えられる。同地点には焼土の塊が検出されているものの、地面の直上で火を焚いていないことから、底や壁の被熱痕が認められておらず、地面で直接火を焚いた炉ではなく器具を用いて加熱するカマド状の遺構と判断される。

また遺物としては、陶器177点、磁器152点、石器・石製品35点、金属製品9点の合計373点を検出した。表土から煙管の吸口（3K001）と穿孔のある石英（3S001）、第2層からは鉄滓（3K007）、カマド状遺構（第12ピット）から石鍋の破片2点（3S030：写真6左、3S033）、管形土錘（3T166）、土師質土器2点（3T163、3T164）、第7ピットからは白磁口禿皿（3G130～132：同一個体）、第10ピットから瓦器碗（3T143）、第16ピットから暗花文を施す染付碗（3G150）、土師質土器2点（3T173、3T174）、角釘（3K008、）無文銅銭（3K009：写真6右）などがそれぞれ出土し、当該遺跡を特徴づける要素となっている。また、舟運の際に船倉に運び込まれた中国産の壺や甕の破片など、陶器の中で輸入陶器は全体の約8%、龍泉窯の青磁、漳州窯の青花、景德鎮窯の青花、白磁口禿皿など、輸入磁器が出土磁器全体の約17%を占め、2020・2021年度調査成果と同様に輸入陶磁が複数出土したことも特徴である。

Ⅲ 調査成果から見た横瀬浦の様相

1. 遺跡の性格

以上の調査成果から、本遺跡の性格について検討してみたい。本遺跡は、近世の『郷村記』に記載された中世当時の町割り「上町・下町」の下町の南端にあたり（藤野1982：271）、中近世当時は海に面した微高地であった。16世紀後半の様子は、イエズス会修道士のルイス・デ・アルメイダの書簡に確認することができ、下町がキリスト教徒の集落、上町がポルトガル人の居住地であったとされている。1563年の焼き討ちの後、人々の暮らしが継続していたことは、『郷村記』に記載されている通りである。

3カ年の発掘調査の結果、13～14世紀頃の掘立柱建物跡とそれに関すると思われるカマド状遺構、15世紀頃の掘立柱建物跡、時代が少し下り17世紀中～後期にかけての埋納遺構を確認し、11世紀から近現代にかけての多様な遺物を検出することができた。特にカマド状遺構からは、炭化米と炭化麦類、動物の歯などが検出されており、また12世紀後半～13世紀の瓦器碗や13世紀頃の土師質土器など中世の生活雑器が多数出土していることから、遅くとも13世紀頃には人々が建物を建て、暮らしを営んでいたと推察される。

また、南蛮船来航の地として史料に語られる16世紀については、3カ年の調査で明確な南蛮貿易の証拠は確認できなかったものの、龍泉窯産青磁や景德鎮窯・漳州窯産青花磁器などの中国産陶磁器が多数出土し、また貿易船で使用されたとみられる中国産の壺（甕）の破片が複数出土していることから、当該地域が中国との貿易港として繁栄していたことが明らかとなった。

一方、1563年の横瀬浦焼き討ち後は、貿易港としての機能は喪失したとされる。ルイス・フロイスの『日本史』の記述において、焼き討ち翌年の横瀬浦が描写されている（フロイス1966：21）。

八月十四日に彼等は横瀬浦沖に到着した。それまで彼等は四十二日を航海に費やしたわけであった。彼等はドン・バルトロメウの様子を知るために陸へ人を遣わした。海岸地帯はまだ人氣が無く、船がそこへ入港する便宜がないことがわかった。そこで、彼等は平戸へ航海を続けた。

同記載から横瀬浦は、焼き討ち後1年間は荒廃していたことがわかる。一方、大村藩の地誌である『郷村記』には、「町屋引きて後大村承林知行に渡る、近き比より又蔵入と成る」とあり、南蛮船渡来の頃の町屋が無くなった後（焼亡後）に横瀬浦を知行したとされる。また、その孫大村五郎左衛門は、朝鮮出兵の頃に二百石を知行し、慶長年間には大村次郎八郎が石高八十二石四斗三合を知行、近世初頭1620年頃には長寄甚左衛門が百石を領していることが記載されており（藤野1982：271）、焼き討ち後も横瀬浦には人々の暮らしが存在したのである。これは、再起不能になるほどの焼失度合いではなく、むしろ復興が早くに始まっていたと考えられる。実際、16～17世紀の肥前陶器（生活雑器）が複数出土しているほか、埋納遺構からは有田産の青磁菊花形皿、2021年度出土の土坑（SX01）からは波佐見産の青磁碗（共に17世紀中頃）が出土している。加えて、後世の攪乱を受けたとみられる表土層からは、18世紀以降の陶磁器が大量に出土しており、出土遺物からも横瀬浦の地には連綿と人々の暮らしがあったことを伺い知ることができる。

つまり本遺跡は、中世以降人々の暮らしが重層的に営まれてきたことを示すものであり、史料に語られる南蛮貿易港「横瀬浦」の前後の歴史を物的に証明する存在と判断される。

2. 調査成果からみた学術的な「問い」

3カ年の調査の結果、その成果からみた

「問い」が大きく3点ある。

第1に、前提条件となる史料に残された「横瀬浦」の繁栄は、史実として存在したかという問いがある。3カ年にわたる調査の結果、中世のものとみられる掘立柱建物跡、近世の埋納遺構、石州銀の切銀、コンタツの玉とみられるガラス製品など中近世における人々の生活の痕跡を発見することができた。一方、2地点で発掘調査を実施しているものの、両地点で焼き討ちの痕跡となる比熱部位は確認できず、またポルトガル人・キリシタン関連の明確な遺物は出土しておらず、南蛮貿易港「横瀬浦」を示す証拠は発見できていないのが現状である。

第2の問いとして、貿易港としての時期の問題がある。試掘調査の結果、中国龍泉窯産の青磁や景德鎮窯・漳州窯産の青花磁器、朝鮮半島産の象嵌青磁など輸入陶磁器が多量に出土しており、年代は11～16世紀の長期にわたることが判明している。一方、明確に横瀬浦が文献に登場するのは、南蛮貿易港として繁栄する前後の1561年～1563年頃であり、それ以前の横瀬浦を示す文献は現時点では確認できていない。ここで、出土遺物と文献記録に齟齬が見いだせる。出土遺物は、16世紀以前の輸入陶磁器が多数あり、特に中国との関係が伺える。つまり、横瀬浦は、南蛮貿易港として開港される以前から、海外との貿易港として使用されていたのではないかと仮説を立てた。貿易港として開港するためには、貿易船が入港できる水深の深い港と荷揚げ設備などある程度の港湾設備・機能が必要である。横瀬浦は、後期倭寇などの貿易で利用され、ある程度の港湾設備・機能が整っていたからこそ、南蛮貿易港として選ばれたと想定している。

第3の問いとして、横瀬浦を利用した商人の出身や属性が挙げられる。2021年度調査において、板状の銀製品が出土した。長

崎県埋蔵文化財センターによる蛍光X線分析の結果、銀の比率が96%、ビスマスを微量に含む銀製品であることが判明した。その後、国立科学博物館の杵名貴彦氏や島根県立古代出雲歴史博物館などに聞き取り調査を行い、組成および形状から石見銀山産の銀を使用した秤量貨幣「石州銀」（古丁銀）の切銀であるとの判断に至った。石州銀は、毛利氏の領国貨幣として中世後期から末期に生産され、近世初頭まで使用された。ここでの疑問は、毛利氏の領国貨幣の石州銀が何故肥前国西端の横瀬浦から出土したかという点である。つまり、石州銀を使用する商人が横瀬浦の貿易に関与していたと判断されるが、文献等が無いため判然としない点が多く存在する。

横瀬浦に関しては、①中世の史料に記載されている南蛮貿易港および焼き討ちについての物的証拠が確認できていない、②試掘調査で南蛮貿易港として栄える以前の貿易陶磁器が多数出土している、③日本国内の限られた地域で流通した秤量貨幣の切銀が出土しているという3点について、未だ解明されていない課題が存在するのである。

Ⅳ 今後の展望

3カ年の調査を踏まえ、2023年度は横瀬浦史跡公園内の「小波止」に調査区を変更し、発掘調査を実施した。9月16日に調査を終了し、ピット3基、2022年度調査で出土した福建省産粗製青磁と近似の青磁、近世～近現代を中心とした陶磁器類が出土した。今回の調査は、横瀬浦天主堂推定地の実態把握を目的としたものであるが、現時点で中世末の様相を示す遺物・遺構は確認できていない。ただし、遺物と遺構が若干確認できており、ピット内からは炭化物が検出されていることから、今後遺物の年代把握および放射性炭素年代測定による炭化

物の年代測定によって遺跡の年代や性格について検討していきたいと考えている。同調査の成果は、2023年度末に発掘調査報告書として刊行する予定である。

加えて、前章2の「問い」で述べた問題点の解消と、中世の横瀬浦の実態解明を目的として、文献調査、発掘調査、科学分析等を用いて横瀬浦にアプローチする研究を2024～2026年度の3カ年にわたって計画している。特に、国内では豊後・博多・堺をつなぐ交易、海外とは日中・日朝・日葡の貿易の実態解明を今後の課題としている。

以上のように、横瀬浦に関する研究はまだ4年目であり、中世貿易港「横瀬浦」の実態解明に向けて継続して調査・研究にあたっていく所存である。

参考文献

- 長崎国際大学博物館学芸員課程，一般社団法人西海文化財研究所（2021）：『長崎県西海市西海町横瀬郷試掘調査報告書』。
- 長崎国際大学博物館学芸員課程，一般社団法人西海文化財研究所（2022）：『長崎県西海市西海町横瀬郷第2次試掘調査報告書』。
- 長崎国際大学博物館学芸員課程，一般社団法人西海文化財研究所（2023）：『長崎県西海市西海町横瀬郷第3次試掘調査報告書』。
- 長崎国際大学（2020）：「学科共同研究一覧」『長崎国際大学論叢』第20巻，長崎国際大学，139頁。
- 原哲弘（2018）：「西海のオアシス—全町公園化構想」『長崎国際大学論叢』第18巻，長崎国際大学，111-121頁。
- 藤野保編（1982）：『大村郷村記』第5巻，国書刊行会，266-271頁。
- 宮本長二郎（1999）：「住の空間 日本中世住居の形成と発展」『建築史の空間：関口欣也先生退官記念論文集』中央公論美術出版，3-23頁。
- ルイス・フロイス著，柳谷武夫訳（1965）：『日本史2 キリシタン伝来のころ』東洋文庫35，平凡社，174-210頁。
- ルイス・フロイス著，柳谷武夫訳（1966）：『日本史3 キリシタン伝来のころ』東洋文庫65，平凡社，19-26頁。